

（「ムーンライト IN 藤原京 2004」開催）

10月9日、大和三山のライトアップイベント「ムーンライト IN 藤原京 2004」の第1部として、藤原京について考える歴史シンポジウム「藤原京と人・歌・ロマン」（主催：ムーンライト IN 藤原京 実行委員会）が橿原市の県社会福祉総合センターで開催され、約250人が参加した。なお、第2部は台風のため中止。

「ムーンライト IN 藤原京」は、橿原の歴史と文化を伝え、観光客を誘致しようという趣旨で始まり、今年で8回目の開催となる。

奈良文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部長の金子裕之氏が「藤原京とキトラ」と題して基調講演。

パネルディスカッションには、パネラーとして金子裕之氏のほか、京都教育大学教授の和田萃氏（古代史）、大東文化大学教授の蔵中しのぶ氏（国文学）、コーディネーターとして滋賀県立大学の菅谷文則氏（考古学）が参加。

694年に飛鳥から遷都した藤原京が、16年の短期間で平城京に移転（710年）したことについては、糞尿のにおいが激しかったなど俗説があるが、

唐の長安城をモデルにした最新の都城を建設するため、との考えが金子氏から披露された。

キトラ古墳や高松塚古墳は、藤原京内での埋葬を禁じたことから、京外の丘陵地（飛鳥）に造られたが、キトラ古墳の築造時期は7世紀末か、高松塚古墳は8世紀前半かについて4人の議論があった。また、各人とも埋葬者については、壁画があるので必ずしも高貴な人とは限らないと結論した。

（上田）



歴史シンポジウム「藤原京と人・歌・ロマン」

（曾爾の獅子舞）

10月10日（開催日は、毎年体育の日の前日の日曜日）、曾爾村の門僕神社^{かどふきじんじや}で例祭が行なわれ、約280年近い歴史を有する伝統芸能の獅子舞が、村の安泰と五穀豊穡を願い奉納された。この獅子舞は、江戸時代の中頃、同村長野の人たちが、伊勢の国へ行って、伊勢大神楽を習ってきたことから始まったと伝えられており、現在は同村の長野・今井・伊賀見の三大字で受け継がれている。（伊勢大神楽は、伊勢神宮に参拝できない西日本の人々に年に一度伊勢神宮のお札を持って廻り、獅子舞を舞ったという）

神社では三大字が競い合うような形で、郷土芸能発表会を行なう。16年の演目は、神前の舞、悪魔払い、獅子踊り、参神楽、三三九度、接ぎ獅子、合同荒舞の順で行なわれた。「神前舞」は、御幣と鈴を持って拝み、白足袋を履くのが特徴。「悪魔払い」は、剣を持って、悪魔を追い払うもの。「獅子踊」は、獅子と天狗と道化が登場し、

遊び疲れて眠り込んだ獅子を天狗が起こし、最後は三者みんなで仲良くなって一緒に踊るもの。「接ぎ獅子」は、獅子を肩に乗せて立たせるアクロバットの獅子舞。「荒舞」は獅子が雄々しく楽しく踊り、リズムも早く荒々しく舞う。

神社での発表が終わった後、獅子舞はそれぞれ地元の地区で披露される。

（上田）



曾爾の獅子舞「獅子踊り」